令和６年度　学校経営報告書

八王子市立みなみ野君田小学校
校長　有本　香織

１　小中一貫教育の推進（みなみ野中学校グループ）

目標	重点的な方策	自己評価（○：成果　△：課題）
義務教育９年間の学びに自覚と責任をもった教育活動の推進	みなみ野中学校グループ挨拶運動、児童・生徒情報引継ぎの会を確実に実施する。	○挨拶運動、３月の小中引継ぎを実施し、小中系統だった生活指導を推進し、児童生徒の心身の健康を図ることができた。 ○【新規】２月の小中一貫教育の日で小中の関係学年ごとに学年の実態及び生活指導について情報共有を行い、児童・生徒理解を深めた。
	小小交流、小中交流を実施し、中一ギャップの軽減を図るとともに、みなみ野中学校グループの一員としての自覚を育む。 ※七国小学校、七国中学校との連携も図る。	○６月みなみ野中学校と合同桑都かるた大会を実施した。「はちおうじっ子サミット」を通して、グループ生としての意識を育むことができた。 ○10 月みなみ野小と共にみなみ野中合唱祭に参加し、小中グループ生全員で合唱した。 ○【新規】合唱祭前に小小顔合わせの会を実施した。グループ生としての意識を向上できた。 △みなみ野小学校の児童と深く関わる交流が不十分である。令和７年度は特に５・６年生の小小交流の充実を図る。 ○１月みなみ野中生徒会による中学校生活の紹介を実施し、中一ギャップの軽減を促進できた。 ○七国中学生の職場体験を実施した。 △七国中学校の部活動説明会、学校紹介の実施には至らなかった。今後、七国中学校と一層の連携を図る。
小学校と中学校のカリキュラムのつながりの強化	小中３校で市学力定着度調査及びはちおうじっ子ミニマム等の分析結果を活用した指導方法の改善を図り、９年間で基礎的・基本的な問題の確実な定着を図る。	○小中３校でグループの独自習得目標問題（算数科）の取組を実施した。小中３校で連携を図り、分析、指導方法改善を推進した。 △市学力定着度調査、はちおうじっ子ミニマムの分析については、校内での分析となった。今後は校内の学力向上委員会を中心にグループ３校で分析、指導方法改善を図り、確実な学力定着に繋げていく。
	小中３校で共通したICT機器を活用した授業スキルの充実を図る。（小中一貫教育の日の充実）	○小中一貫教育の日を年３回開催し、小中３校で ICT ツールの活用について情報共有をした。校内では ICT ツールの研修を３回実施し、教員全員の ICT 活用スキルの向上を図った。

２　確かな学力の育成

目標	重点的な方策	自己評価（○：成果　△：課題）
基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着	朝学習、補充学習の効果的な活用を通して、基礎的・基本的な内容の定着を図る。 地域と連携した放課後補習教室を週２回実施する。	○放課後補習「のびのびタイム」（教員）、放課後補習教室「パワーアップタイム」（地域人財）、放課後子ども教室「きみだランド」（宿題の取組）の３つの場を設け、児童が活用できた。 ○計画的に補充学習を行った結果、はちおうじっ子ミニマムの第１回と第２回の平均正答率が上がった。 [国語]＋7.9 ポイント　[算数]＋7.5 ポイント ○東京ベーシックドリルを年２回実施し、校内学力向上委員会での分析結果を基に、補習学習を実施した。 ○朝読書を年間 60 回実施し、児童の読解力、想像力、表現力の向上及び読書習慣の定着が図られた。 △東京ベーシックドリル及び市学力定着度調査の結果を踏まえた放課後補習の有効活用が課題である。
	一人一台タブレット端末を活用した家庭学習を推進する。	○市学力定着度調査の結果をもとにドリルパーク「ミライシード」を活用した家庭学習を推進した。 ○【新規】３年生以上において、毎週一人一台学習用端末を活用した宿題に取り組ませたことで、児童の ICT 機器活用力が向上した。また、ICT 機器を活用した学習について保護者理解が深まった。
	校内に学力向上推進組織を設置し、学力の分析及び対策を検討し実施する。	○市学力定着度調査を分析し、課題を明確にした補習を実施することができた。 △正答率の低い項目について、組織的に補充を強化する取組を実施していく。
主体的・対話的で深い学びに向けた授業改善の推進	【新規】年間６回の校内研究に算数科の授業研究、特別支援教育研修を位置付け、主体的・協働的な学び及び個別最適な学びの実現を図る。	○年３回の研究授業（算数科）では、指導方法の共通理解を深め、主体的・協働的に学ぶ力を育成できた。 ○【新規】特別支援教育研修を年３回実施し、児童理解及び指導方法の充実を図り、個別最適な学びを推進した。 △ユニバーサルデザインの考えに基づいた学習環境の構築及び個に応じた指導の充実において、まだ十分とは言えない。今後も引き続き推進していく。
	ICT機器を効果的に活用した授業を展開する。	○年３回の授業観察の中で、ICT 機器の効果的な活用を位置付けた。また、ICT 機器の授業での活用力向上のための OJT を計画的に実施し、全教員が ICT 機器を有効活用した授業を実施できた。
体験的・協働的な活動の充実による思考力・判断力・表現力の育成	身近な郷土学習において、発達段階に合わせた課題を設定し、主体的・協働的に解決する探求的な学習を通して、思考力・判断力・表現力を育成する。	○３年生以上の全学年で郷土学習を行った。児童の郷土愛及び主体的・協働的に学ぶ力を育成できた。 ３年生：「蚕を育てよう・八王子の絹織物」 ４年生：「高尾山　日本遺産学習」 ５年生：「八王子市の特色調べ・紹介」 ６年生：「八王子市姉妹都市日光の学習」

	算数科・理科を中心にプログラミングのアプリケーションやツールを活用した学習を展開し論理的思考力を育成する。	○地域企業によるプログラミング教育(年 30 回)を実施し、児童の興味関心を高めるとともに、論理的思考力の育成を図った。 △算数科･理科におけるプログラミング教育の計画の実施を徹底していく。

3　**豊かな心、人間性の育成**

目標	重点的な方策	自己評価（○：成果　△：課題）
自己肯定感及び自己有用感の育成	問題行動調査やふれあい月間の取組を通して、認知されたいじめについて確実な解消まで継続して対応し、解消率の向上を目指す。また、いじめ対応の時間を活用し、子どもの心身の健全な育成及び自己肯定感を培う。	○ふれあい月間の取組で認知したいじめについて、いじめ対応の時間や生活指導夕会等において全教職員で共有し、確実な解消まで継続して対応した。 ○いじめ対応の時間、見守りシートの活用を確実に実施し、児童に寄り添った早期対応ができたことで、重大事態につながるいじめはゼロであった。
	不登校や登校しぶり傾向の子どもについては、校内委員会を含め、地域の関係機関とも連携しながら、安定した登校ができるよう支援していく。	○不登校や要支援児童について、適時校内委員会を開催し情報及び対応を共有した。市登校支援チームのスクールソーシャルワーカーとの連携を強化し、全児童が学校や地域、フリースクール等と繋がることができた。 △全教員が同じ考えのもと同じ対応ができるよう、令和５年度に「不登校対応マニュアル」を作成したが、活用の徹底が不十分である。活用を推進していく。
	校内での子どもが安心できる居場所づくりを推進し、どの子も安心して通える学校づくりを推進していく。	○【新規】学校コーディネーター、放課後子ども教室と連携し、毎日、午前７時から午前７時55分まで朝の校庭開放「早朝きみだランド」を実施した。毎回約 100 名の児童が活用し、子どもの朝の居場所づくりを実現できている。 ○【新規】人財の確保等学校運営協議会の協力のもと、地域人財を活用した校内別室指導支援教室「ぽかぽかルーム」を毎日開設し、不登校や登校しぶり、学校不適応の児童の居場所づくりを行った。R5 からの不登校解消者６名（R6 新規２名）と成果を上げた。 △現在、『ぽかぽかルーム』は東京都の施策である校内別室指導支援員制度を活用している。本制度が R6・R7 の２年間に限るため、この後の継続が課題である。 ○多様な児童の心の拠り所・つながる場所づくりとして、全校児童に向けて、中休み・昼休みの校長室開放を実施している。R6 は年間延べ 1,614 名（３月 10 日現在）の児童が利用し、児童にとって安心できる居場所として定着できた。（R5 は 1,559 名利用）
	特別の教科道徳の授業を始めとする教科指導や生活指導、特別活動、学校行事などを通して自他の良さに気付かせ、自己肯定感を高める。	○「命の尊さ」を重点項目とし、「八王子市いのちの大切さを共に考える日」の校長講話、特別の教科道徳の授業を実施し、児童の自他の生命を尊重する態度を育成できた。 ○異学年交流や学校行事等児童が自ら創意工夫して運営する取組の充実を図り、主体的に取り組む態度を育んだ。児童アンケートの主体性の項目では、肯定的回答は 91％であった。 ○年間を通して、学校便り、ホームページ等で保護者・地域に自己肯定感を醸成への協働を呼び掛けた。児童アンケートの自己有用感の項目では、肯定的回答は 91％であった。 △自己肯定感・自己有用感の低い児童について、引き続き教科指導や学校行事等学校生活の中で、自他の良さに気付き、互いの存在を認め合えるよう働きかけを継続していく。
	【新規】保護者との一層の連携を図り、子どもの心を育む。	○個人面談を１学期に加え２学期にも実施し、年２回実施した。学校と家庭が児童の情報を共有できる機会が増え、より一層連携して児童を育むことを推進できた。

4　健やかな身体の育成

目標	重点的な方策	自己評価（○：成果　△：課題）
体力向上の推進	毎学期、全校で体力向上及び体つくり運動に取り組む。２学期、３学期に長縄大会を実施し、目標に向かって仲間と頑張る力を養う。	○運動週間として、１学期は柔軟性を高める運動、２学期は持久走、３学期は短縄に全校児童が取り組み、体力向上を図るとともに、運動する楽しさを味わわせることができた。 ○２学期、３学期に長縄大会を実施した。クラスごとに練習に励み、目標に向かって頑張る力を養うとともに、仲間と共に成し遂げるよさを感じさせることができた。
	オリンピック・パラリンピックのレガシーとして、トップアスリートやスポーツの専門家を招き、子どものスポーツ志向を高める。	○年４回アスリートやスポーツの専門家による授業を実施し、みなみ野君田小学校オリンピック・パラリンピック 2020 レガシーとして定着させることができた。来年度も引き続き計画していく。 ４年生：「三菱重工相模原ダイナボアーズ」ラグビー ５年生：「東京八王子ビートレインズ」バスケットボール ６年生：「インテルアカデミー・ジャパン」サッカー
健康への関心の向上	１～３年生では、栄養士をゲストティーチャーとして、給食の食材を活用した体験活動や食育の授業を実施する。	○１～３年生全クラスで栄養士による食育の授業を実施し、児童の食への興味・関心を高めることができた。児童アンケートの食育に関する項目では、肯定的回答は 88.5%であった。

5　地域人財・地域資源を活用した教育活動の充実

目標	重点的な方策	自己評価（○：成果　△：課題）
地域人財や地域資源を活用した教育活動の推進を通した地域の一員としての自覚の育成	学校運営協議会が主体的に取り組む教育活動（漢字検定、体験型サマースクール、君田畑プロジェクト）を実施する。	○11 月に学校運営協議会主催・保護者ボランティア協働による漢字検定を実施した。約 100 名の児童が参加し、児童の学習意欲の向上を図ることができた。 ○学校運営協議会主催の体験型サタデースクールを年間９回開催し、児童の体験活動の充実を図ることができた。 ○【新規】地域団体「みなみ野自然塾」の指導・支援のもと、５年生の米作りの学習を実施した。計画的に実施し、地域の方と協働する喜びと地域の一員としての意識の醸成を図ることができた。
	「社会の力活用事業」「地域の企業や大学」「学習支援ボランティア」等の地域人財を積極的に活用した教育を展開する。	○地域企業によるプログラミング教育(年 30 回)、地域在住のネイティブスピーカーによる英語授業補助（通年）等、地域人財の活用を推進し、学習内容の充実を図ることができた。 ○【新規】地域企業への社会科見学（３年、５年）、地域団体「みなみ野自然塾」による稲作体験学習（５年）等、地域人財を活用した教育を推進した。
	学校運営協議会を中心に地域人財を活用した放課後補習教室「パワーアップタイム」を週２回実施する。	○年間を通して、地域人財を活用した放課後補習教室を週２回確実に実施し、学習習慣の確立及び学習内容の定着を図ることができた。昨年度よりも参加児童が増えた。 [R5]704 名　→[R6]1,657 名（３月 10 日現在）
	保護者・地域の読み聞かせボランティア「おはなしスタジオ」の充実を図り、情操教育を推進する。	○保護者による読書ボランティアに加え、全学年を対象とした「おはなしスタジオ」を計画的に実施し、児童の想像力の育成及び感情の理解や共感力の醸成を図り、感性の豊かさを育むことができた。
	地域人財を活用した保護者・地域向けのサロンを開催し、学校教育や子育ての理解を深めるとともに、子どもたちを育むネットワークの構築を図る。	○保護者・地域向けサロンを年間３回実施した。 △参加者が少人数であること、固定化したメンバーのみの参加であることが課題である。他での実践事例及び保護者・地域のニーズ等を鑑みて再考する。

6　学校組織の機能強化

目標	重点的な方策	自己評価（○：成果　△：課題）
ライフ・ワーク・バランスの理念に基づいた校務改善の推進	校務システムを活用した業務連絡の徹底や、ICT 機器のアンケート機能の活用による作業の効率化を図り、教員が児童に向き合う時間を生み出す。	○ICT 機器によるアンケートを効率的に活用できた。 ○校務システムの活用促進により企画会議の廃止、夕会回数の削減等会議を精選し、教員が児童と向き合う時間を確保することができた。 △校務システムを活用した業務連絡事項と夕会及び職員会議での連絡事項の重複があった。会議での伝達事項を精査し、効率化を図る。
	【新規】全学年で一部教科担任制を実施し、教材研究や授業準備の時間の充実を図る。	○全学年で一部教科担任制を実施し（２年生のみ交換授業）、教科の専門性の強化、教材研究の時間の充実、児童に向き合う時間の確保、児童理解の深化を図ることができた。
	【新規】保護者の卒業アルバム委員を募集し、保護者参画型による卒業アルバム作成を推進する。	○卒業アルバム作成を保護者参画型として保護者の卒業アルバム委員を募集した。保護者有志と６年生アルバム委員の児童、学校（窓口：管理職）が協働してアルバムを作成したことで、教員の働き方改革を推進することができた。
	方策全般を通して	○働き方を見直したことで、一月の時間外労働時間が平均 60 時間を超える教員ゼロを達成できた。 △教員間で時間外労働時間に大きな偏りがある。校内組織の見直しを図り、働き方改革を推進する。
校内支援体制の確立	週１回、いじめ対応の時間を設定し、いじめ防止対策、いじめの早期発見・早期対応の校内支援体制の確立を図る。	○毎週木曜日の６時間目にいじめ対応の時間を設定し、教員、養護教諭、生活指導主任と情報を共有し、いじめ防止及びいじめの早期発見・早期対応に努め、組織的な対応ができた。引き続き組織対応の充実を図り、重大事態につながるいじめゼロを目指す。
	毎月、校内委員会を開催し、校内の特別支援に係る諸問題について関係諸機関と連携を図り対応していき、支援体制の確立を図る。	○月に１回、必要に応じて適時、校内委員会を開催した。特別支援コーディネーターを中心に、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、特別支援教室、関係諸機関との連携を図り、養護教諭及び教員と、児童の情報を共有し対応することができた。 △校内教職員全員が同じ対応ができるよう共通理解の一層の充実を図る。
	【新規】一人一人の子どもを大切にする教育の充実に向けて、特別支援教育の推進を図る。	○校内の委員会組織に特別支援教育委員会を位置付けたことで、組織的な特別支援教育を強化することができた。